柳澤壽男福祉ドキュメンタリー映画祭　最終第５回

風とゆききし

日時●2024（令和6）年8月25日（日）　２回上映
　①10時00分～12時45分　②13時30分～16時10分

入場料●300円（当日のみ。資料代含む）

会場●藍住町総合文化ホール　大ホール
　771-1203　徳島県板野郡藍住町奥野字矢上前32－1
　☎088・637・3344

主催●徳島で柳澤壽男監督作品をみる会
　（代表＝ＮＰＯ法人太陽と緑の会　☎088・642・1054）

共催●藍住町総合文化ホール

●柳澤壽男監督（1916～1999、享年83）は、近年高く再評価されているドキュメンタリー映画の巨匠です。小川伸介、土本典昭、黒木和雄などの優れた監督が尊敬したことでも知られます●特に福祉ドキュメンタリー５部作は、障がい者問題を静かに見つめ、色あせない問題提起を我々に投げかけてくる力強い作品で、東京や神戸などで上映会が行われています●映画史的には2018年に新宿書房から分厚い資料集『そっちやない、こっちや　映画監督・柳澤壽男の世界』が刊行されたことで、その作品評価はゆるぎないものになりました●この企画は、監督の弟子筋にあたる太陽と緑の会・杉浦良が、天国の師匠に捧げる渾身企画です●徳島で５年間かけて柳澤福祉ドキュメンタリー５部作を藍住町総合文化ホールで上映する試みです。多数ご参集ください。

風とゆききし

製作・監督＝柳澤寿男
撮影＝瀬川順一、瀬川浩、柳田義和
撮影助手＝瀬川龍、山田達也、北條豊
音響＝村上文朗、長島久雄
ナレーション＝伊藤惣一/録音＝奥井義哉
音楽プロデューサー＝斉藤晃
音楽ディレクター＝八木良弘/作曲＝木村正巳
演奏＝仙台チェンバー・オーケストラ
主題歌＝「生きてりゃいいさ」
作詞・作曲＝河島英五/歌＝早坂弘美
監督助手・スチール＝小林茂/題字＝磯田充子
製作デスク＝滝沢千歳、中居きぬえ子
タイトル＝淵脇国盛（菁映社）/ネガ編集＝高橋辰雄/現像＝ソニー・PCL株式会社
製作協力＝TVI・テレビ岩手、東北放送株式会社、東北映画制作株式会社、サウンド企画D・C、仙台市赤生木のみなさん、仙台市宮城地区青年団、福祉バンクの職員・所員と盛岡市民のみなさん
製作＝財団法人盛岡市民福祉バンク
1989年/16ミリ/カラー/115分
日本映画ペンクラブ推薦優秀作品

1989年（平成元年）12月16日　土曜日　岩手日報

障害者を追い続けて

福祉記録映画の第一人者　柳澤寿男監督にきく

完成した第5作「風とゆききし」

福祉にも〝効率主義〟

本音と建前かい離

■財団法人「盛岡市民福祉バンク附属いきいき牧場」の看板に「能率やお金で価値を社会のなかでは、どうしても幸せを求めることが難しく、いつもはみ出している人々がいます。そして誰もがそうなります。それならば〝違うものさし〟でその幸せをはかるもう一つの社会をつくってみようと思うのです。」とありました。私は〝違うものさし〟にこだわりつづけました。どうしたらそこへの道が筋がみつかるか、それがずっと私の仕事の主題だったからです。

私はいままで障害を背負った人たちの映画を作り続けてきました。いつでも、おおよそ百日、あるがままの状況を撮り、現像した編集用フイルムを撮った私と撮られた人たちとでくりかえし見て、日ごろ気がつかなかったよいところ、不満足なことろを改善する手段方法を考え実行して、それを撮る。またくりかえして見る。こういう作業をつみ重ねて〝違うものさし〟をさがす。

私はこれを〝行って来いの関係〟といって大事にしてきました。盛岡市民福祉バンクでもそれが出来るだだろうと期待しました。

私と福祉バンクで所員と呼ばれる人たちの間に、私と福祉バンクの職員との間に、私とボランティアとの間に、福祉バンクの職員と所員との間に、〝行って来いの関係〟が成り立ったなら、もう少し〝違うものさし〟の実体が見えてきたはずです。それが出来ませんでした。私の力不足からです。〝行って来いの関係〟のないところには自由も平等もない。落ちこぼれの集団のなかから更に落ちこぼれをつくっていく仕組みが生まれるだけだと実感しました。『風とゆききし』はその報告です。

もう一つ。私たちの中に障害を背負った人たちは、何も見ていない、考えない、働けないという誤った常識があります。

私にはこの人たちの願望、意見を代弁できません。『風とゆききし』のなかで、私はこれでもか、これでもかとこの人たち自身の言葉で語ってもらいました。私たちの誤った常識を正したかったのです。この人たちは聞いてもらいたいのです。多くの人たちとの対話をもとめているのです。どんな形でもいいから答えてあげて下さい。『風とゆききし』の作り手の私と、この作品を見てい下さる方々との間に〝行って来い〟の関係が生まれることを切望します。

柳澤寿男

■大河的ドキュメンタリー映画

「風とゆききし」より

白井佳夫

身心障害者たちのことにかかわる運動がはじまったり、あるいは施設が設立されたりするということは、実は彼ら彼女らがより自由に、より生き生きと生きていけるような共和国のような場を、この現実世界に作ろうとする運動であり、施設作りなのではないだろうか。しかし、その運動が具体的にはじまり、施設が作られ職員がそこで働きはじめてそれが本格化したりすると、なぜ総ては逆になったりしてしまうことに、なるのであろうか。

運動そのものが、施設が、職員が、むしろ身心障害者たちを管理し、縛り、規制して、その生き生きとした自由を妨害するようなものにさえなっていってしまう。いったいそもそもの共和国作りの良き意志というものは、どこにいってしまうのであろうか。彼ら彼女らのための共和国作りというものは、かなわぬ夢のようなものなのか。

そうではないであろう。私たち健常者とよばれる、実は表面では見えないかもしれない障害や傷の数々を内に秘めている人間たちと、障害者とよばれる、外見からもわかるような障害や傷をもった人間たちが、手を結んでお互いに支えあい、運動をおしすすめ、施設を作り、職員を構成していったら、この現実世界にも、共和国は生まれ得るはずなのである。

そこでは、身心障害者たちがより自由に、生き生きと生きていけるのはもちろん、いわゆる健常者たちもまた、それにかかわることによって、より自由で生き生きと生きていくことを、学べるにちがいないのである。そこからは、イデエなき現代という時代を生きていくための、大きな示唆のようなものも、生れてくるにちがいないのである。